The Story of Pocahontas Based on Historical Documents

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 円 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6071

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

史料が語るポカホンタス

佐　藤　　円

はじめに

ポカホンタス（Pocahontas）は、実在した人物としては、おそらく歴史上最も有名なアメリカ先住民女性である。17世紀の初頭にイングランドによるヴァージニア植民地の建設が始まったころ、彼女が属するパウハタン族（the Powhatan）[1] に捕らえられていた植民者のジョン・スミス（John Smith）を、彼女の父親であるパウハタン（Powhatan）[2] 大族長が処刑しようとした時、自ら身を挺して助命嘆願し、その命を救ったとされる話は、小説や絵本、そして絵画や映画によって繰り返し語られ、アメリカ（本稿ではアメリカ合衆国をアメリカと略称する）では知らない人がいないロマンチックな「建国神話」となっている。他方日本でも、1995年にディズニーの長編アニメーション『ポカホンタス』[3] が公開されたことにより、彼女の知名度は一気に上がり、それとともに彼女にまつわる「神話」が多くの人々に知られることとなった。しかしディズニー版の『ポカホンタス』は、スミスを助命したという話を物語のハイライトとしながらも、従来のような植民者の男性に恋心を抱いて、その身を挺して命を助けた一途な先住民女性としてポカホンタスを描いておらず、むしろアメリカ先住民文化のすばらしさを語り、植民者の男性に対しても対等に振る舞う自立した女性として描いているため、従来の彼女にまつわる古典的な「神話」が表

1　“Powhatan”は従来日本においては「ポーハタン」と音訳されてきたが、本稿ではより原音に近い「パウハタン」と表記する。このパウハタン族は、17世紀初頭には多くの小部族を統合した人口１万3000人～4000人あまりの先住民連合体であった。Helen C. Rountree, *The Powhatan Indians of Virginia: Their Traditional Culture* (Norman: University of Oklahoma Press, 1988) p.15を参照。なお、本稿においては先住民の民族集団を呼ぶ場合に、「～族」あるいは「部族」という用語を使用するが、近年このような用語を「民族」の同義語として先住民などに対してだけ使用することについては、そのような対象による使い分けが持つ西洋中心主義的、植民地主義的な含意を文化人類学者らが厳しく批判している。歴史学研究である本稿においては、その批判の妥当性を承認しつつも、「～族」あるいは「部族」という用語が持つ歴史性を重視して、暫定的に使用し続けるものとする。

2　大族長の名前は部族名と同じとされているが、これは君主号のようなもので、史料によるとこの「パウハタン」という名前は、もともとは先住民の集落の名前に由来すると言われている。さらに彼には、この名前の他にワフンセナカウ（Wahunsenacawh）という本名や、それ以外にもいくつかの名前があったとされている。Helen C. Rountree, *Pocahontas, Powhatan,Opechancanough: Three Indian Lives Changed by Jamestown* (Charlottesville: University of Virginia Press, 2005) pp. 32-33を参照。

3　*Pocahontas*, directed by Mike Gabriel and Eric Goldberg, Walt Disney Pictures, 1995.

象してきた植民者の男性と先住民の女性の関係性の「歪み」が見えにくくなっている。実際にこのアニメーションでは、配役の声を演じる声優にもアメリカ先住民の著名人を起用するなど[4]、マイノリティから差別的だと批判されないように「政治的に正しい（politically correct）」物語をつくろうとしたあまり、古典的な「ポカホンタス神話」にこそ表れていた植民者と先住民の間の、あるいは男性と女性の間の非対称な関係性が脱色され、一見すると当たり障りのないハッピーエンドの物語が展開されているため、それによって初めて「ポカホンタス神話」に触れた人々には、これまで長年にわたってアメリカで愛され、語り継がれてきた「ポカホンタス」に出会うことができなくなっているのである。

これに対し、日本では2006年に公開された、ポカホンタスとジョン・スミスを主役に据えたテレンス・マリック（Terrence Malick）監督による実写版の映画『ニュー・ワールド』[5]は、相変わらずの古典的でロマンチックな物語となっており、本来の「ポカホンタス神話」がどのようなものであるかを知るためには格好の材料となっている。この映画は、実際にヴァージニアで当時を再現した精巧なセットを組み上げて撮影されただけでなく、先住民の配役に先住民系の役者を起用し、彼らに現在では死語となっているパウハタン語に近いとされるアルゴンキン語の台詞をしゃべらせ、先住民や植民者の風俗についても細かく考証を行っているため、ディズニー版『ポカホンタス』に比べると、はるかに「本物らしい」雰囲気を醸し出している。ポカホンタスが若い娘として描かれ、植民者であるスミスと恋に落ち、彼の命を救うというところまではディズニー版と同様であるが、その「本物らしさ」は彼女の後半生の描き方でも徹底しており、イングランドへ帰国したスミスと別れた後、別の植民者であるジョン・ロルフ（John Rolfe）と結婚し、自らもイングランドに渡ってスミスと再会し、最後は病に倒れて亡くなるという結末まで描いている[6]。この映画によって「ポカホンタス神話」に初めて触れた人々は、長年にわたってポカホンタスの物語がどのように語り継がれてきたのか、その典型に触れることができるのである。また映画を見た観客なかには、当時を再現する精巧なセットのなかで、当時の衣装に身を包んだ先住民系の

4　大族長パウハタンの役に声優として、かつてのアメリカ先住民権利回復運動の闘士であったラッセル・ミーンズ（Russell Means）を起用している。またポカホンタス役にも、アラスカ出身のアメリカ先住民の女優アイリーン・ベダード（Irene Bedard）が起用されている。

5　*The New World,* directed by Terrence Malick, Sarah Green Film, 2005.

6　実はディズニーも『ポカホンタス』の続編として家庭視聴専用のビデオ版『ポカホンタスⅡ―イングランドへの旅立ち』（*Pocahontas II: Journey to a New World*, directed by Tom Ellery and Bradley Raymond, Disney Toon Studios, 1998）を1998年に製作しているが、その内容は完全なフィクションのハッピーエンドとなっており、「神話」とはかけ離れたものになっている。なお興味深いのは、日本語版の副題が「イングランドへの旅立ち」となっているのに対して、本来の英語の副題は、あえてポカホンタス（アメリカ先住民）側の視点に立ったものにしている点である。なぜそのようにすることに意味があるのか、日本では理解されないと予測されたために、日本語版の副題はあえて「分かりやすい」ものにしたものと思われる。

女優が演じるポカホンタスの物語を、まさに「史実」と受け止めた人もいたかもしれない。あるいは映画では、あくまで自らの愛を貫こうとする無垢な先住民女性というポカホンタス像が終始強調されていたため、逆に実際の彼女はどのような人物であったのだろうかと疑問をかき立てられた人もいたかもしれない。

さて本稿では、これまでディズニー版『ポカホンタス』や映画『ニュー・ワールド』のように、フィクションを交えながら様々に語り継がれてきたポカホンタスの物語から、明らかにフィクションである部分をはぎ取り、あくまで残されている史料の記述だけを頼りに語り直した時に、ポカホンタスの一生はどのような物語になるのか、改めて整理してみたいと考えている。ポカホンタスの人生を語るという作業は、すでに彼女の伝記や彼女に関わる歴史学的研究でも行われてきたことではあるが、本来非常に限られている彼女に関する史料的情報で一冊の本を書くために、著者たちのほとんどは想像力と歴史的知識を最大限活用して、多くの推測によって情報の空白を埋めようとている[7]。本稿ではそのようなことはせず、史料の記述をそのまま紹介していきたいと思う。もとより筆者が提示しようとしているポカホンタス像に、極力フィクションや推測が含まれないようにしたからと言って、そのことをもってそれこそが「史実」と主張したいわけではない。ポカホンタスに関する限られた史料は、後述する通り、当時のイングランド人が書き残したものしかなく、それがどの程度「事実」に基づいたものであるかもよく分からない。それでも史料を重視せざるを得ない歴史学研究者として筆者は、あまりにも有名になり、尾ひれがつきすぎているポカホンタスの物語を、今一度史料が語るままの形で提示することによって、少なくとも彼女にまつわる「神話」や、それをもとに創作されてきたフィクションとの違いを検証する機会を提供したいと考えている[8]。

7　ポカホンタスに関する伝記や研究は数多く出版されており、それを網羅的に紹介できないが、本稿ではさしあたり以下の文献を参照した。Philip L. Barbour, *Pocahontas and Her World* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1969); Grace Steele Woodward, *Pocahontas* (Norman: University of Oklahoma Press, 1969); Frances Mossiker, *Pocahontas: The Life and The Legend* (New York: Knopf, 1976); J. A. Leo Lemay, *Did Pocahontas Save Captain John Smith?* (Athens, Georgia: University of Georgia Press, 1992); Robert S. Tilton, *Pocahontas: The Evolution of an American Narrative* (New York: Cambridge University Press, 1994); Paula Gunn Allen, *Pocahontas: Medicine Woman, Spy, Entrepreneur, Diplomat* (New York: HarperCollins, 2003); Camilla Townsend, *Pocahontas and the Powhatan Dilemma* (New York: Hill and Wang, 2004); Helen C. Rountree, *Pocahontas, Powhatan,Opechancanough: Three Indian Lives Changed by Jamestown* (Charlottesville: University of Virginia Press, 2005); Dr. Linwood "Little Bear" Custalow and Angela L. Daniel "Sliver Star,"*The True Story of Pocahontas: The Other Side of History* (Golden, Colorado: Fulcrum Publishing, 2007).

8　日本において、このような作業を行った先行研究としては、富田虎男「ポカホンタス」猿谷要他編『人物アメリカ史１―自由の新天地』集英社、1984年、31－56頁があるが、一般の読者向けに書かれたものであるため、史料の典拠が細かく示されていない。本稿では富田氏の研究を参考にしつつも、具体的に典拠を示しながら、より網羅的に史料の紹介をしていく。

以下本稿では、まずポカホンタスについて記述している史料にはどのようなものがあるのかを解説することから始め、その上で、ポカホンタスにまつわる史料の情報を項目別に分類し、史料が複数ある場合にはその記述を比較しながら、時系列的に彼女の人生をたどり直していくことにする。この作業を行う際、アメリカのリーハイ大学（Lehigh University）のサイト“The Pocahontas Archive”（http://digital.lib.lehigh.edu/trial/pocahontas/）にある史料一覧を参考にした。本稿では、そこに紹介されている史料と実際の史料と突き合わせて確認し、サイト上の情報に誤りがある場合には、それを実際の史料に従って訂正して利用している。わずかな誤りは含まれるものの、このサイトはポカホンタスに関する最も網羅的な情報を提供しており、ポカホンタスに関心がある者にとっては大変利用価値の高いものである。なお、本稿の最後に、付録としてポカホンタス関連年表を作成して添付した。必要に応じて適宜参照していただきたい。

1．利用可能な史料とその著者たち

ポカホンタスについて記録した利用可能な史料はそれほど多くない。最も頻繁にポカホンタスについて言及している記録者は、ポカホンタスによって命を救われたとされるジョン・スミス本人である。探検家である彼は、植民地建設を目的とした最初の船で1607年４月にヴァージニアに到着し、イングランドへ帰国する1609年９月までヴァージニアに滞在したが、その間の1608年に報告書である*A True Relation of Such Occurrences and Accidents of Noate as Hath Happened in Virginia*（以下本稿では『真実の物語』略称する）を書き、それはロンドンへ送られてすぐに出版された。このなかに最も早い段階のポカホンタスに関する記述が登場する。またスミスは1622年に、1620年に出版した*New England Trails*（以下本稿では『ニューイングランドの踏み分け道』と略称する）の改訂版を出版したが、そのなかでパウハタン族の捕虜となったスミスがポカホンタスに助けられたと、出版されたものとしては初めてポカホンタスによる助命の話に触れている。ただしそこでは、細かい状況の説明は一切ない。さらに1624年になるとスミスは*The Generall Historie of Virginia, New-England, and the Summer Isle*（以下本稿では『ヴァージニアの歴史』と略称する）を出版したが、そこで「ポカホンタス神話」のもととなったポカホンタスによるスミスの助命の詳しい顛末が書かれている。また『ヴァージニアの歴史』には、助命の話以外のポカホンタスに関する重要な情報もいくつか記録されている。その後1630年にスミスは死の直前に、*True Travels, Adventures and Observations of Captain John Smith*（以下本稿では『キャプテン・ジョン・スミスの冒険』と略称する）を出版したが、ポカホンタスに関しては、彼女によって助命された話がごく簡単に触れられているのみである。以上のように、スミスによるポカホンタスに関わる記述のほとんどは『ヴァージニアの歴史』にあるため、本稿ではそれを中心的な史料として利用することになる[9]。

さて、これらのスミスが残した史料以外を見た場合、他の書き手によって残されたポカ

ホンタスの記録はそれほど多くないが、それらのうち、少しでも利用可能なものを年代順に挙げると以下のようになる。まず、スミスを含む多くの植民者によって書かれた雑多な記録をヴァージニア植民の後援者でもあった牧師のウィリアム・シモンズ（William Symonds）が編集し、1612年に出版した*Proceedings of the English Colony of Virginia*（以下本稿では『ヴァージニア植民地報告書』と略称する）がある。これは1612年にジョン・スミスが出版した*A Map of Virginia*（以下本稿では『ヴァージニア地図』と略称する）の続編として同じ年に出版されたもので、ポカホンタスの年齢やスミスとの関係について触れた箇所がある[10]。 次に、1610年から11年にかけてヴァージニア植民地に滞在し、短期間であったが植民地の書記官を務めたウィリアム・ストレイチー（William Strachey）が1612年に出版した*Historie of Travell into Virginia Britania*（以下本稿では『ヴァージニア紀行』と略称する）が挙げられる。この著作は、スミスを初めとする他者のヴァージニアに関する報告をそのまま借用しつつ、自らの見聞を付け加えて構成されたもので、子供時代のポカホンタスについてのストレイチー自身の観察が記されている[11]。次に利用できるものとしては、ヴァージニア植民地を建設していたヴァージニア会社の株主であったジョン・チェンバレン（John Chamberlain）が1613年から1617年にかけて書いたいくつかの書簡が挙げられる。彼は生涯にわたり多くの書簡を有力者宛てに書いたが、それらはエリザベス1世からジェームズ1世にかけての時代を知る上での貴重な史料として書簡集としてまとめられている。そのうちポカホンタスについては、５つの書簡で彼女のイングランド滞在に関して触れられている[12]。 次に挙げられるものとしては、牧師であったサミュエル・パーチェス（Samuel Purchas）が多くの旅行記やその他の文献を編集して1613年に出版し、翌1614年ならびに17年と25年の３回にわたって改訂を重ねた*His Pilgrimage or Relations of the World and the Religions*（以下本稿では『世界遍歴の物語』と略称する）がある。この著作は多くの部分が他の著作からの引用であるため、断片的に現れるポカホンタスに関する記述の

9　ジョン・スミスが残したすべての史料は、スミスやポカホンタスの伝記的研究を行っているフィリップ・Ｌ・バーバー（Philip L. Barbour）によって全集としてまとめられており、本稿でもそれを使用する。Philip L. Barbour ed., *The Complete Works of Captain John Smith (1580-1631)*, 3 vols (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1986).

10　このウィリアム・シモンズが編集した『ヴァージニア植民地報告書』も上記バーバー編のスミスの全集に収められている。Barbour ed., *The Complete Works of Captain John Smith (1580-1631)*, vol.1 (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1986)pp.199-273.

11　ウィリアム・ストレイチーの『ヴァージニア紀行』には多くの復刻版があるが、本稿では以下の1849年のハクルート・ソサエティ版のものを参照した。William Strachey, *Historie of Travell into Virginia Britania,* ed. Richard Henry Major (London: Hakluyt Society, 1849; reprint, Cambridge: Cambridge University Press, 2010). また同版はインターネット・アーカイブ（http://archive.org/）からも参照可能。

12　ジョン・チェンバレンの書簡については、以下の書簡集にある。Norman Egbert McClure ed., *The Letters of John Chamberlain*, 2 vols (Philadelphia: American Philosophical Society, 1939).

ほとんどは、すでに他の史料で確認できるものであるが、ポカホンタスの本名についての情報やロンドン滞在に関する記述はパーチェス自身が書いたものである[13]。次に、スミスが残したもの以外で最も情報量が多い史料として、植民者の一人であったラルフ・ハマー（Ralph Hamor）が1615年に出版した*A True Discourse of the Present Estate of Virginia*（以下本稿では『ヴァージニア事情』と略称する）が挙げられる。この著作には、実際にヴァージニア植民地に滞在したハマー自身の見聞のみならず、ヴァージニア植民地代理総督であったトーマス・デイル（Thomas Dale）やポカホンタスの夫となる植民者ジョン・ロルフ（John Rolfe）の手紙なども収録されており、ポカホンタスが植民地側に誘拐された状況やロルフとの結婚の事情などを知ることができる[14]。最後に、文献ではないが、オランダ人の画家サイモン・ヴァン・デ・パッセ（Simon Van de Passe）が1616年にイングランド滞在中のポカホンタスを描いた肖像版画が挙げられる（80頁の図版１参照）。この同時代人によって描かれた肖像版画からは、ポカホンタスの容姿が分かるだけでなく、版画に添えられた文字から、彼女の本名や洗礼名、あるいは年齢に関する情報が得られる[15]。

以下本稿では、上記の史料が語るポカホンタスをそのまま紹介し、その上で必要に応じて筆者なりの解説を加えながら、彼女のその人生を再構成していきたい。なお、ここで紹介した史料の復刻版の多くが、現在“Internet Archive”（http://archive.org/）を利用して参照可能であることを付け加えておく。

13　この４つの版があるサミュエル・パーチェスの『世界遍歴の物語』は、第４版のみ表題が異なる。Samuel Purchas, *Purchas His Pilgrimage: or, Relations of the World and the Religion Observed in All Ages and Places Discovered, from the Creation unto This Present* (London: Printed by W. Stansby for Henrie Fetherstone, 1613); *Idem*, 2nd ed.(London: Printed by W. Stansby for Henrie Fetherstone, 1614);*Idem,* 3rd ed., 2 parts(London: Printed by W. Stansby for Henrie Fetherstone, 1617); *Hakluytus Posthumus, or, Pruchas His Pilgrimes. Containing a History of the World; in Sea Voyages and Lande-Travells, by Englishmen and Others*, 4 parts (London: Printed by W. Stansby for Henrie Fetherstone, 1625) なお第３版と第４版は復刻版が何種類か出版されているが、本稿では第３版について以下の復刻版を利用した。Samuel Purchas, *Purchas His Pilgrimage* , 3rd ed., 2 parts(London: Printed by W. Stansby for Henrie Fetherstone, 1617; reprint, Whitefish, MT: Kissinger Publishing, 2010). また第２版については前掲のインターネット・アーカイブから、さらに第４版についてもアメリカ議会図書館のサイトThe Kraus Collection of Sir Francis Drake（http://memory.loc.gov/intldl/drakehtm/rbdkhome.html）から参照でき、本稿ではそちらを参照した。

14　本稿では、ラルフ・ハマーの著作の復刻版のうち、前掲のインターネット・アーカイブから参照可能な以下のものを利用した。Ralph Hamor, *A True Discourse of the Present Estate of Virginia, and the Successe of the Affaires There till the 18 of June, 1614* (London: Printed by John Beale for William Welby, 1615; reprint, Richmond: Virginia State Library, 1957).

15　“Matoaka als Rebecca” engraved by Simon Van de Passe, 1616. このサイモン・ヴァン・デ・パッセによるポカホンタスの肖像版画は、複製品を含め、様々なインターネットサイトで参照可能である。例えば、アメリカ合衆国連邦議会図書館印刷物・写真部門のオンラインカタログ（http://loc.gov/picture/）を参照。

2．ポカホンタスの名前

ではまず手始めに、史料に登場するポカホンタスの名前から検討を加えることとする。彼女の名前は、綴りに違いがあるものの（ジョン・スミスの『真実の物語』では“Pocahuntas”；同じくスミスの『ヴァージニアの歴史』では“Pocahontas”；ウィリアム・ストレイチーの『ヴァージニア紀行』では“Pocahunta”もしくは“Pochahuntas”；サミュエル・パーチェスの『世界遍歴の物語』では“Pokahuntis”；ジョン・ロルフが書いた手紙では“Pokahuntas”）、どの史料においてもほぼ「ポカホンタス」で一致している。現在一般化している彼女の名前の綴りは、「ポカホンタス神話」のもととなったスミスの『ヴァージニアの歴史』に依拠したものである。他方ストレイチーによると、パウハタン族の男、女、子供には複数の名前があり、この「ポカホンタス」という名前も本名ではなく、当人の性格を表すものとして父親であるパウハタン大族長がつけた“little wanton”という意味のあだ名であって、本当は「アモヌテ（Amonute）」と呼ばれていたと説明されている[16]。この「アモヌテ」という「本名」がどのような意味であったのかは史料に説明が無く分からないが、ポカホンタスという名前が英語で“wanton”という意味であるというストレイチーの説明については少し検討の余地がある。

この今日ではあまり使われない“wanton”という形容詞は、OEDによると17世紀初めの英語では「ふざけた」「気まぐれな」「横柄な」「理不尽な」「無慈悲な」「みだらな」といろいろな意味があった。特に女性に対しては「みだら」という意味でしばしば使われていたと解説されている。そのうちのどの意味でストレイチーがこの“wanton”という言葉を使ったのか、ポカホンタスという名前の意味を説明する部分にはそれ以上何も判断材料となる文言が書かれていないため、特定することができない。しかし、ストレイチーは『ヴァージニア紀行』の他の部分でも衣服着ていない彼女を“wanton young girl”と評している[17]。このことから類推すると、彼が“wanton”という言葉を性的な意味合いを込めて使った可能性も高い。もしそうであれば、ポカホンタスという名前は「みだらな子供」というような意味だったことになる。しかし大族長の娘に対して、それも幼い時期に父親がつけたあだ名として「みだらな子供」は適当なものとも思いにくい。そのためか伝記のなかには、このポカホンタスという名前の意味について、「みだら」以外の“wanton”の意味を採用して、「いたずらっ子」という意味であると説明しているものもある[18]。はたして「ポカホンタス」とはどのような意味で、彼女はどのような性格の子供であったのだろうか。

このことを判断する上での障害は、“wanton”という英語の意味の解釈という問題以上に、そもそもストレイチーによる「ポカホンタス」という当時のパウハタン語についての

16　Strachey, *Historie of Travell into Virginia Britania*, p. 111.

17　*Ibid*, p. 65.

18　例えば,Townsend, *Pocahontas and the Powhatan Dilemma,* p. 14.

説明が正確であったのかというより根本的な問題がある。しかし残念ながらパウハタン語は現在では死語であり、パウハタン語に関する記録も断片的なものしか残っていないため、先住民側から「ポカホンタス」という言葉の意味を確かめることもできない。序論でも述べた通り、ヨーロッパ人が残した史料のみでアメリカ先住民について研究することにはこのような困難が伴う。そういう事情もあり、イングランド人が残した史料に基づく先住民研究について批判的なマタポナイ族（the Mattaponi）のオーラル・ヒストリーでは、ポカホンタスという名前は「陽気で、楽しい人」という意味であると明言している[19]。しかし、それが正確な説明であるのか、何ら傍証も示されていないので、歴史学的に判断することは難しい。結局本稿でも、この「ポカホンタス」という名前の意味について、「みだらな子供」という説明では納得がいかないという立場から、しばしば「いたずらっ子」「陽気な子供」という意味であると説明されていると紹介することしかできない。

さて、ポカホンタスにはさらに「アモヌテ」という名前以外にも、もう一つ別の「本名」があったと史料では紹介されている。パーチェスは、彼女の本名は「マトケス（Matokes）」であり、そのことがイングランド人に知られると良からぬことが起こるという迷信から、イングランド人には秘密にされていると、ポカホンタスが植民地側に誘拐されたことを記述した部分の欄外に注記している[20]。さらに植民地側に誘拐されたポカホンタスを預かったと言われている牧師のアレクサンダー・ホイタッカー（Alexander Whitaker）も、ポカホンタスの結婚とキリスト教への改宗について記述している部分で、彼女の別名は「マトア（Matoa）」であると述べている[21]。またロンドン滞在中の1616年にサイモン・ヴァン・デ・パッセが描いた肖像版画にも、別名は「マトアカ（Matoaka）」であると書かれている[22]。（80頁の図版１参照）この「マトケス」「マトア」「マトアカ」という「本名」がどのような意味であったかについては、史料に何も説明がないので分からない。

他方、キリスト教に改宗した際にポカホンタスにつけられた洗礼名は、どの史料でも「レベッカ（Rebecca）」となっており、共通している[23]。キリスト教に改宗した後のポカホンタスは、おそらくこの名前でイングランド人たちから呼ばれたものと思われる。

３．ポカホンタスの生年

では次に、ポカホンタスの生年がいつであったのかという問題について、彼女の年齢に

---

19 “Little Bear” Custalow and Daniel “Sliver Star,” *The True Story of Pocahontas,* p. 7.

20 Purchas, *Purchas His Pilgrimage*, 3rd ed., part 2, p. 943.

21 Hamor, *A True Discourse of the Present Estate of Virginia*, p. 59.

22 “Matoaka als Rebecca”engraved by Simon Van de Passe, 1616.ポカホンタスの本名としてしばしば「マトアカ」という名前が言及されるのは、このパッセの肖像版画に依拠している。

23 Purchas, *Purchas His Pilgrimage*, 3rd ed., part 2,p. 943; Barbour, *The Complete Works of Captain John Smith*, vol. 2, p. 258; “Matoaka als Rebecca”engraved by Simon Van de Passe, 1616.

ついて言及している史料を使って検討する。ただしこの件について、史料の記述は一致していない。その理由は、史料を残した人物たちのほとんどが年齢についてポカホンタス本人に確認しておらず、あくまで自身の推定を述べているにすぎないからである。

さて、そのようなポカホンタスの年齢の推定のうち最も早い段階のものはスミスの推定である。彼は1608年出版の『真実の物語』において、1608年当時ポカホンタスは「10歳の子供だった」と述べている[24]。この推定からポカホンタスの生年を逆算すると1598年ということになる。彼女の年齢に関する次の推定としては、1612年に出版されたシモンズ編の『ヴァージニア植民地報告書』において、植民者のリチャード・ポッツ(Richard Pots)とウィリアム・フェティプレイス（William Phettiplace）が1609年1月を回想しながら「多く見積もっても13、14歳を越えていない」と述べているところがある[25]。こちらが正しければ、ポカホンタスは1595年か1596年に生まれたということになる。この推定は、ストレイチーが1612年に出版した『ヴァージニア紀行』で、1608年当時彼女は「11、12歳であった」と述べてい

図版1．サイモン・ヴァン・デ・パッセによるポカホンタス像

出典：Helen C. Rountree, *Pocahontas, Powhatan,Opechancanough: Three Indian Lives Changed by Jamestown* (Charlottesville: University of Virginia Press, 2005) p.181より転載。

24　Barbour, *The Complete Works of Captain John Smith,* vol. 1, p. 93.

25　*Ibid*, vol. 1, p. 274.

ることともおおよそ一致している[26]。つまりストレイチーが正しければ、ポカホンタスは1596年か1597年に生まれたということになる。しかしスミスは1616年にアン王妃へ送ったとされる手紙のなかで、1607年の出来事を回想しながら、再度ポカホンタスは「12、13歳の子供だった」とも述べている[27]。こちらの方が正しければ、ポカホンタスは1594年か1595年に生まれたことになる。さらに、ポカホンタスがイングランド滞在中に描かれたサイモン・ヴァン・デ・パッセの肖像版画には、「1616年に彼女の年齢は21歳（Aetatis suae 21 Anno）」とラテン語で書かれている（80頁の図版１参照）。もしかすると、これは本人から直接聞いた情報かもしれないが、これが正しいなら、彼女の生年は1595年ということになる。

以上がポカホンタスの年齢について史料で言及されている推定の全てである。逆算によって得られるポカホンタスの生年は、1594年、1595年、1596年、1597年、1598年と4年の開きがあるが、どれが正しいものであるのかを判断するための材料は他には何もない。そのためほとんどの先行研究は、上記5つの推定における結果が重複している1595年か1596年がポカホンタスの生年としての蓋然性が高いと判断しているようである。以下、本稿もそれに従う。

４．ポカホンタスによるスミスの助命

次に「ポカホンタス神話」のもととなった、ポカホンタスによるジョン・スミスの助命の話について、史料はどのように伝えているのか見ていく。

1607年５月に植民地を建設するためにヴァージニアに上陸した104人のイングランド人たちは、夏を越すまでに食糧不足や慣れない気候のために病に倒れ、あるいは先住民との衝突によって、40人以上が命を落とすという危機に陥っていた。その窮状を打開するために、秋以降ジョン・スミスは交易をしに先住民の集落をたびたび訪れ、彼らとの取引によって食糧の確保を試みていた。しかし12月ころ出発したそのような交易目的の探検の途上、スミスは先住民側に捕えられ、いくつかの集落を連れまわされた末にパウハタン族の首都であったウェロウォコモコ（Werowocomoco）へ連行された。そこでパウハタン大族長と面会し、尋問を受けた末に処刑されそうになったところをポカホンタスが身を挺して助命嘆願したことによって助けられ、1608年１月初めにジェームズタウンへと帰還した。以上が、複数の史料を総合して一般に語られているスミスがパウハタン族に捕虜にされ、ポカホンタスによって助命されて解放された状況の概略である。しかしこの出来事があったとされる直後の1608年にスミスによって書かれた報告書『真実の物語』には、この有名なポカホンタスによる助命の話どころか、大族長との面会の場面にポカホンタスすら登場しない。『真実の物語』では、以下のように語られている。少し長くなるが引用する。

26　Strachey, *Historie of Travell into Virginia Britania,* p. 65.

27　Barbour, *The Complete Works of Captain John Smith*, vol. 2, p. 258.

ウェロウォコモコに到着すると、パウハタン族の王がたくさんの真珠の首飾りと素晴らしいアライグマの上着を身にまとい、10枚から12枚の敷物を敷き詰めた1フィートほどの高さがある寝台に堂々と横たわっていた。彼の枕元には一人の女が座り、また足元にも別の女が座っていた。焚火の両側には、彼の重臣たちがそれぞれ10人ずつ地面に敷いた敷物の上に列になって座り、その後ろには同じくらいの数の若い女たちが大きな白いビーズの首飾りを肩からたらし、髪の毛を赤く染めて座っていた。王があまりにも威厳のある堂々とした態度をとっていたので、裸の野蛮人の姿をしていたにもかかわらず、私は彼に畏敬の念を抱いた。王は温かい言葉と大皿に盛られたさまざまな食べ物によって私を歓待してくれ、友情と4日以内の解放を約束してくれた。王はとても楽しそうにオペチャンカナウ〔パウハタン大族長の弟—筆者付記〕から私が彼に語った話を聞き、繰り返しそれは事実かと私に尋ねた。・・・

・・・中略・・・

・・・私は王に、私が臣下となっている私たちの大王が支配しているヨーロッパの領土や、彼の所有するおびただしい船舶について説明しながら、彼にラッパの音色について、さらには私が七つの海のウェロワンスと、彼らの言葉で王を意味する言葉を使って呼んだ私の主人ニューポート船長が繰り広げる戦いが、いかに恐ろしいものであるかを分からせようとした。王はニューポート船長の偉大さには驚嘆しつつも、少しも恐れを抱かず、私にパスパヘ〔ジェームズタウンに対するパウハタン語の地名—筆者付記〕を離れて、王が支配する川の沿岸にあるカポホワシックと呼ばれる場所で彼とともに暮らすよう求めた。王は私にトウモロコシや鹿肉など、われわれが必要とする食糧を与えること、そして誰にも私たちの邪魔をさせないようにすることを約束し、私たちには彼のために斧と銅釜を作るように求めた。私が王の申し出を実行すると約束したため、私は王から、私を満足させるために王が思いつくかぎりの親切な扱いを受けた。つまり、私のガウンと背嚢を担いで私の後を歩く一人と、食糧を担ぐ二人、そして私と歩く一人という4人の従者を与えられて、家へと送り届けられたのである[28]。

これに対し、スミスが1624年に出版した『ヴァージニアの歴史』では『真実の物語』とは全く異なり、ポカホンタスによるスミスの助命の一件が以下のようにドラマチックに語られている。

28 Barbour, *The Complete Works of Captain John Smith*, vol. 1, pp. 53, 57. なお引用した史料は、アメリカ学会訳編『原典アメリカ史—社会史史料集』岩波書店、2006年、58‐60頁所収の拙訳に加筆したものである。

・・・最後にパウハタン族は、スミスを彼らの王であるパウハタンが暮らすウェロウォコモコへと連れて行った。そこでは200人以上の恐ろしげな廷臣たちが、パウハタンとその従者たちが美しい衣装を身につけている間、あたかも怪物か何かを眺めるような目つきでスミスを見つめながら立っていた。パウハタンは焚き火の前にある寝台のような形の椅子の上に、アライグマの毛皮でできていて、その尻尾がたくさんぶら下がった見事なローブを羽織り腰を下ろした。彼の傍らには一人の16歳から18歳くらいの若い女が座り、また建物の壁に沿った両側には、男たちが二列に座った。またその後ろには、髪と肩を赤く染め、白いビーズの立派な首飾りをかけ、頭に鳥の白い羽毛の飾りか、また何か別の飾りをつけた同じくらいの数の女たちが座った。いよいよパウハタンの前にスミスが引き出されると、その場にいた全ての人が大きな叫び声をあげた。・・・中略・・・そしてパウハタン族は、野蛮人としては最高のもてなし方でスミスにご馳走をふるまった後、長い協議を行った。その結果２つの大きな石がパウハタンの前に運ばれてくると、スミスはたくさんの男たちに取り押さえられ、その２つの石まで引きずられていった。そして、石の上に頭を乗せられ、まさに棍棒によってスミスの頭が打ち砕かれようとしたその時、王の愛娘であるポカホンタスが、もはやいかなる嘆願も聞き届けられないと知ると、スミスの頭を腕で抱え込み、彼の命を救うために自分の頭を彼の頭に重ね合わせた。それを見たパウハタンは、スミスを生かしておくことに同意し、スミスにはパウハタンのために斧を、またポカホンタスのためには鈴やビーズや銅釜を作らせることにした。・・・

・・・人間というよりは悪魔のような姿のパウハタンが、彼と同じように色黒の200人ほどの人々を伴いスミスのところへやって来て、次のように言った。今やパウハタン族はスミスの仲間であり、まもなくスミスはパウハタンに贈る大砲２門と石臼１つを手に入れるためにジェームズタウンへと帰ることになった。パウハタンはその贈り物の代わりに、カポホワシックの土地をスミスに与え、今後はずっとスミスのことを自分の息子ナンタクウォッドと見なすと。こうしてパウハタンは、12人の付き添いをつけてスミスをジェームズタウンへと送り返したのである[29]。

実際のところ、前述した通り、このポカホンタスによるスミスの助命の話は、上記のような具体的な話としてではなく、ごく簡単に、それも婉曲に『ヴァージニアの歴史』が出版される２年前の1622年に出版されたスミスの『ニューイングランドの踏み分け道』第２版でも、次のように言及されている。「最大の窮地に陥ったときに、パウハタン族は私に矢を

29　Barbour, *The Complete Works of Captain John Smith,* vol. 2, pp. 150-51. なお引用した史料は、アメリカ学会訳編『原典アメリカ史―社会史史料集』56-57頁所収の拙訳に加筆したものである。

射かけ、私の部下３人を殺害し、退却した彼らは愚かにも私を捕虜とした。しかし神様が王の娘であるポカホンタスのことを、私を救い出す手段にして下さったことは本当の話である。」[30]この簡単な説明こそがポカホンタスによるスミスの助命という出来事についての出版された史料上の初出であるが、この時点での言及のされ方では、実際にポカホンタスがどんな「救出の手段」になったのか何も分からない。また、ほぼ同じ内容の助命に関する簡単な説明が、1623年にスミスが書いた、当時先住民側の攻撃で大きな被害を受けていたヴァージニア植民地を再建するために組織された王立委員会宛ての報告書にもあるが、こちらの説明でも詳しい事情は全く分からない[31]。さらに『ヴァージニアの歴史』の出版の後になるが、1630年にスミスが出版した『キャプテン・ジョン・スミスの冒険』にも、前述した通り、スミスのポカホンタスによる助命の話が同じような簡単な記述で登場する[32]。しかしこれは、『ヴァージニアの歴史』の出版後であるため、ただその内容を要約しただけのものであって、あまり重要ではない。

さて、それではこのポカホンタスによるスミスの助命は実際に起こった出来事であったのだろうか。この件については、19世紀の文筆家ヘンリー・アダムズ（Henry Adams）がスミスの捏造であるという説を1867年に唱えて以来、今日に至るまで、歴史学者や文化人類学者の間で論争が続いている。ポカホンタスによる助命の話を事実と主張する側は、その根拠として、スミスやポカホンタスを知る同時代人が誰もこの話を嘘だと否定していない点や、スミスが残した他の史料が大体において事実を正確に伝えていることを挙げている。しかしその一方で、ポカホンタスによる助命という出来事そのものは、パウハタン族がスミスを養子にするために行った儀式を、スミスが誤解したものだったとしている場合が多い。これに対し、助命の話はスミスの捏造とする側は、その根拠として、スミスとポカホンタスを直接知る同時代人が、この話に対して一切言及していないこと、またスミスが残した史料にはしばしば事実の歪曲や話の捏造が見られる点を挙げている。また、これに加えて、助命が行われたはずの1607年の翌年に書かれた『真実の物語』にその話が全く出てこず、その一方でポカホンタスがイングランドでも有名人になり、さらに亡くなった後の1624年に出版された『ヴァージニアの歴史』の方にこの話が突然詳細に登場することはいかにも怪しいとしている[33]。

本稿では、そのどちらの主張が正しいものであるかを判断しないが、1607年末の出来事とされるポカホンタスによるスミスの助命の話が、スミスが残した史料以外には書かれておらず、それを補強する傍証すらないことについて、さらに史料的な説明を加えておきた

30　Barbour, *The Complete Works of Captain John Smith*, vol. 1, p. 432.

31　Edward Arber ed., *Travels and Works of Captain John Smith* (Edinburgh: John Grant, 1910) P. 611.

32　Barbour, *The Complete Works of Captain John Smith,* vol. 3, p.237.

33　論争について詳しくは前掲の Lemay, *Did Pocahontas Save Captain John Smith?* を参照。

い。スミス以外の人々がこのスミスの助命の話に言及する場合、それはいつもスミスの史料からの引用となっている。例えば、サミュエル・パーチェスは1625年の『世界遍歴の物語』第４版になって初めて、それまでの版にはなかったスミスがポカホンタスに助命された話を書き加えている[34]。つまり、スミスの助命の話が初めて詳しく語られる『ヴァージニアの歴史』が出版された1624年以前にスミス以外の人々が残した史料、例えばウィリアム・シモンズ編の1612年の『ヴァージニア植民地報告書』やウィリアム・ストレイチー編著の1612年の『ヴァージニア紀行』、さらには上記パーチェス編の1617年に出版された第３版までの『世界遍歴の物語』やラルフ・ハマー編著の1615年の『ヴァージニア事情』には、スミスが助命された話は全く出てこないのである。

このスミスが助命された話についての言及で、唯一明らかに時期的に早いものと考えられるのは、1624年の『ヴァージニアの歴史』に収録されている1616年にスミスがアン王妃へ送ったとされる手紙である。ポカホンタスをアン王妃に紹介する目的で書いたこの手紙のなかで、スミスは「私の処刑の瞬間、彼女は自らの頭がたたき割られる危険を冒して私を救おうとしたのです」と助命の話に触れている[35]。ただし、この手紙そのものが別に独立した史料として残っているわけではなく、あくまで『ヴァージニアの歴史』に転載されているという体裁のものであるため、史料としての信憑性は必ずしも高くない。確かに説明の言葉があまりに短く、実際に何が起こったのか知りたければ『ヴァージニアの歴史』の本編を読まざるを得ないような言及の仕方であるため、『ヴァージニアの歴史』を書いた際に付け加えられた偽史料ではないかと疑われているのである。

さらにもう一つ、同時代の目撃者の史料として触れておかなければならないものが、ポカホンタスによるスミスの助命が行われたとされる1607年に、スミスとともにジェームズタウンにいた植民地評議会初代議長エドワード・マリア・ウィングフィールド（Edward Maria Wingfield）が残した記録*A Discourse of Virginia*（以下本稿では『ヴァージニアの話』と略称する）である。この『ヴァージニアの話』には、1607年12月10日にスミスが食糧調達のためにヴァージニア奥地に向かい探検に出た際にパウハタン族に捕えられ、その後パウハタン大族長と面会してから解放されて1608年１月にジェームズタウンへ帰還したことが記述されているが、1608年のスミスの『真実の物語』と同様、ポカホンタスによるスミスの助命の話も、ポカホンタスの名前も出てこない[36]。スミスが一旦パウハタン族側の捕虜となり、その後ジェームズタウンへ帰還したことは、このウィングフィールドの記録で確認できるが、まさにそれを目撃していた人物がポカホンタスによるスミスの助命の話

34 Purchas, *Hakluytus Posthumus, or, Pruchas His Pilgrimes*, part 4, p. 1712.

35 Barbour, *The Complete Works of Captain John Smith*, vol. 2, p.259.

36 Edward Maria Wingfield, *A Discourse of Virginia*, edited by Charles Deane (Boston: Privately printed [J. Wilson and Son], 1860) pp. 31-32.

という重要な出来事を記録として残さなかったことは確かに不思議である。

5．仲介者としてのポカホンタス

次に、1608年１月にスミスがジェームズタウンへ帰還して以降のポカホンタスの動静について、史料が語るところを見てみる。

1608年のスミスの『真実の物語』は、スミスが帰還してからまもなくして、父親であるパウハタン大族長の命を受けたポカホンタスが、植民者たちの武器を盗もうとして捕まっていた部族民の引き取りのために、ロウハント（Rawhunt）という名前の使者とともにジェームズタウンを訪れたという出来事を伝えている。それが、スミスが残した史料のなかでは最も古い『真実の物語』におけるポカホンタスの初出であるが、スミスはその部分でポカホンタスのことを以下のように評している。「パウハタンは我々が何人かの野蛮人を拘留していることを知って、彼の娘である10歳の子供を送って寄こした。彼女は、姿、顔立ち、体つきが残りの部族民よりきわめて優れているだけでなく、知力や精神の面でもパウハタンの国では比類なき人物である。」[37]10歳の少女に対してはいささか大げさなほめ言葉であるが、「父親が娘を送って寄こすという友情に報いるため、我々は教会の前まで捕虜を連れて行き、祈りを捧げてから、王の娘であるポカホンタスへ引き渡した」[38]と捕虜の引き渡しがポカホンタスを相手に行われたと述べていることから判断すると、少女であってもポカホンタスは重要人物として扱われていたということのようである。

この捕虜のポカホンタスによる引き取りの話は、1612年のウィリアム・シモンズ編『ヴァージニア植民地報告書』にも書かれており、そこでは「・・・悪事をはたらいた者たちは、我々を攻撃するために我々の武器を手に入れてくるようにというパウハタンただ一人の指示に従っただけだと告白した。・・・しかしパウハタンは部下たちの非礼を詫びるために使者とともに最愛の娘であるポカホンタスを送って寄こし、友情を約束しながら捕虜の解放を求めた。スミスは捕虜に適切な罰を与え、一両日働かせてから、ポカホンタスに免じて捕虜を彼女に引き渡した・・・」[39]とある。この記述は、もしかしたらスミスの『真実の物語』からの間接的な引用かもしれないが、スミスの史料にはない情報も含まれていて興味深い。

さて、この1608年に行われた捕虜の引き取りと同じ頃のことであると思われるが、1608年１月にイングランドからやって来た補給船によって届けられた物資が火事によって焼失して再び食糧難に陥っていたジェームズタウンに、パウハタン大族長がスミスへの贈り物としてたびたび食糧を届けさせたという話が史料に出てくる。またスミスによると、その

37　Barbour, *The Complete Works of Captain John Smith*, vol. 1, p. 93.

38　*Ibid*., p. 95.

39　*Ibid*., pp. 220-221.

食糧をジェームズタウンに届けたのはポカホンタスであったとしている。まず1612年のシモンズ編『ヴァージニア植民地報告書』には、この件について、「キャプテン・スミスが解放された後すぐに、約束通り一日おきに野蛮人たちはたくさんの食糧や魚、そして七面鳥、リス、鹿といった野生動物をスミスのもとへ届けたが、その一部は彼らの王からスミスへの贈り物であった」[40]と書かれている。これに対して1624年のスミスの『ヴァージニの歴史』では、「その後たえず４、５日に１回、ポカホンタスがお供と一緒にたくさんの食糧をスミスに届けてくれたので、我々の多くの命が救われたし、それがなければ飢えのために餓死していたはずだ」[41]とポカホンタス自身が救援物資を運んできたと説明している。その食糧支援からあまり時間を経ていない時期に出版されたシモンズ編の『ヴァージニア植民地報告書』の方にポカホンタスの名前がないことから、スミスが1624年に言ったように、ポカホンタス自身が実際に救援隊に加わっていたかは疑わしいが、少なくともパウハタン大族長は、捕虜として捕えていたスミスと交わした約束を果たしていたことが分かる。

これに対して、1612年にウィリアム・ストレイチーが出版した『ヴァージニア紀行』には、前述したポカホンタスの名前や年齢に関して検討した部分でも少し触れたが、時折ポカホンタスがジェームズタウンを訪ねたことについて、スミスとは異なる観察が以下のように書かれている。「・・・パウハタンの娘であるポカホンタスは、容姿端麗だがみだらな少女であった。その頃11、12歳であった彼女は、時折我々の砦にやって来た。少年たちに先導させながら市がたつ広場へやって来て、少年たちに手で輪をつくらせ、その輪が持ち上げられたところに倒れ込んで遊んだ。そして少年たちを追いまわし、裸で砦じゅうをぐるぐるとまわった。」[42]ここに見られるポカホンタスは、捕虜の引き取りなどやりそうもない、無邪気な子供の姿である。

その一方で、1624年のスミスの『ヴァージニアの歴史』には、1608年の秋にスミスが補給船の船長であったクリストファー・ニューポート（Christopher Newport）とパウハタン大族長の戴冠式を行うと称してウェロウォコモコを訪れた際に、ポカホンタスらパウハタン族の女性たちから「仮面劇」で歓待されたという話と、翌1609年初めにスミスが食糧調達のために再びウェロウォコモコモコを訪れた際に、パウハタン大族長がスミスを謀殺しようとしているとポカホンタスから知らされたことによって難を逃れ、再度命を救われたという話が出てくる。

まず前者については、「パウハタンは30マイルほど離れたところにおり、目下呼び戻されているところであったが、同じときにポカホンタスとその侍女たちが次のようなやり方でスミスを歓待した。・・・30人ほどの若い女たちが、わずかな木の葉で前後を隠しただ

40　Barbour, *The Complete Works of Captain John Smith*, vol. 1, p. 215.

41　Barbour, *The Complete Works of Captain John Smith*, vol. 2, p. 152.

42　Strachey, *Historie of Travell into Virginia Britania,* p. 65.

けの裸の姿で森のなかから現れた。・・・地獄からの叫び声をあげるこれらの悪霊たちは、木々の間から声を張り上げながら現れ、焚火の周りで輪になって、とても不吉なことをいろいろとしながら歌い踊り、しばしば悪魔のような激情にかられ、そしてその後はまた重々しい声で歌い踊った。だいたい１時間くらいこの仮面劇が続いた後、彼らは登場したときと同じように退場していった」[43]と書かれている。他方後者については、「キャプテン・スミスの首を取りたくて仕方がないパウハタンと彼の部下たちは、もしも彼を殺すことができたなら、すべては彼らのものになると考えていたので、目的を果たす機会を逃すことはなかった。夜になるまでインディアンたちは思いつく限りの娯楽で時間をつぶし、その後、手勢を使って夕食を食べているスミスを屋内で急襲しようと準備していたパウハタンのもとへと戻っていった。それにもかかわらず、すべてお見通しの神様が不思議なやり方で、彼の目論みを阻んでくださった。すなわち、彼の最愛の宝である娘のポカホンタスが、暗い夜に厄介な森を抜けてやって来て、我々の隊長〔スミス―筆者付記〕に次のように言ったのである。しばらくすると大きな椅子〔食事用の？―筆者付記〕が運ばれてくるはずだが、その後にパウハタンが集められるだけの手勢を連れてやって来て、我々皆を殺そうとしている。・・・それゆえ死にたくなければ、逃げてほしいと。スミスは彼女が喜びそうなものを礼に与えようとしたが、彼女の頬には涙が流れていた。・・・[44]」

このスミスによる二度のウェロウォコモコ訪問については、1612年のシモンズ編の『ヴァージニア植民地報告書』にも記述があるが、そちらではどの場面にも全くポカホンタスは登場しない。特に後者のポカホンタスによって危険を知らされて命拾いをしたという出来事があったはずの二度目の訪問について、シモンズの『ヴァージニア植民地報告書』ではそのような緊迫した状況としてではなく、平和裏に食糧調達に関する話し合いがパウハタン大族長との間で行われている様子が記録されている[45]。さらにスミスは、1624年の『ヴァージニアの歴史』において、上記のように自身がポカホンタスによってまた助けられたと書くだけでなく、自分以外にも植民者のリチャード・ウィフィン（Richard Wyffin）とヘンリー・スピルマン（Henry Spilman）の二人がパウハタン大族長に殺されかけた時にポカホンタスによって助けられたと類似した話を書いている[46]。このような話も、シモンズ編の『ヴァージニア植民地報告書』の同じ出来事を記述した部分には見当たらない[47]。そうなるとやはり、ポカホンタスがスミスを含む植民者を助けたというこの話も、スミスによる後年の創作が疑われる。はたして当時11、12歳の少女であったポカホンタスは、スミ

43 Barbour, *The Complete Works of Captain John Smith,* vol. 2, p. 182.

44 *Ibid*., pp. 198-199.

45 Barbour, *The Complete Works of Captain John Smith*, vol. 1, pp. 243-250.

46 Barbour, *The Complete Works of Captain John Smith*, vol. 2, pp. 203, 232.

47 Barbour, *The Complete Works of Captain John Smith*, vol. 1, p. 254, 275.

スや他の植民者がウェロウォコモコを訪問した時にどこで何をしていたのであろうか。スミスが残した史料以外からは何も分からない。

他方最も多くポカホンタスについて記録を残してきたスミスは、1609年10月に火薬の暴発による怪我のためにイングランドへ帰還した[48]。このスミスのイングランド帰還が影響しているのか、それ以後1613年までの間、ポカホンタスはいずれの史料からも姿を消してしまう。ちょうどこの頃からパウハタン族と植民地の関係は悪化し、衝突がしばしば起こっていたため、ポカホンタスの消息も分からなくなっていたのかもしれない。唯一この間の彼女の動静を伝えるものとしては、1612年に出版されたウィリアム・ストレイチーの『ヴァージニア紀行』に、「・・・以前我々の砦に時折訪れていたパウハタンの娘であるポカホンタスは、2年ほど前にココアム（Kocoum）と呼ばれる部族の公職についていない族長と結婚をした」[49]という記述があるのみである。このココアムという人物は、前述したマタポナイ族のオーラル・ヒストリーでは、パウハタン大族長の部下であり、後述するポカホンタスの誘拐に深く関わるヤパズィウス（Iapazeus）の弟とされている[50]。しかし、史料からはココアムが誰であったかは情報がなく、全く分からない。いずれにせよ、この記述が事実とするならば、1610年ころに14、15歳のポカホンタスは一度結婚していたことになる。

6．ポカホンタスの誘拐、改宗、結婚、出産

さて次に、1613年に当時17～18歳になっていたポカホンタスが植民地側に誘拐され、ジェームズタウンで囚われの身として過ごした時期に関する史料の記述を見てみたい。

まず、ポカホンタスが植民地とイングランドを往復していた補給船の船長であるサミュエル・アーゴール（Samuel Argall）に誘拐された件については、1613年のジョン・チェンバレンの手紙や1614年に出版されたサミュエル・パーチェスの『世界遍歴の物語』第2版、1617年の第3版、そして1625年の第4版、さらには1624年のジョン・スミスの『ヴァージニアの歴史』にも書かれているが、ここでは最も詳しい記述がある1615年のラルフ・ハマーによる『ヴァージニア事情』を典拠に、その状況について概略を説明する。

パウハタン大族長のお気に入りの娘であったポカホンタスがポトマック川沿いにあるパタオメック（Pataomecke）という集落で行われていた祭りで交易をするために出かけ、

---

48 *Ibid*, p.272.

49 Strachey, *Historie of Travell into Virginia Britania*, p. 54.

50 Custalow and Daniel “Sliver Star,”*The True Story of Pocahontas*, pp. 43, 47. なおイアパズィウスの名前についてCustalow と Daniel “Sliver Star” は「ジャパザウ（Japazaw）」と表記しており、またジョン・スミスは1624年の『ヴァージニアの歴史』で「ヤパザウス（Iapazaws）」と表記しているが、本稿では彼についての情報を最も詳しく残したラルフ・ハマーが1615年に出版した『ヴァージニア事情』での表記「ヤパズィウス（Iapazeus）」に従う。

そこに３カ月ほど滞在していた1613年の４月に、そのことがアーゴール船長の知るところとなった。アーゴールはパタオメックに旧知の先住民がおり、その兄弟であるヤパズィウスを買収し、彼とその妻を使ってポカホンタスを騙して誘拐することにした。その動機は、「もし本当にパウハタンが娘のことを愛しているというのなら、彼女を取り戻すために、彼は捕えているイングランド人の捕虜を解放するだろうし、奪った武器を引き渡すであろう」というものであった。ヤパズィウスは、イングランド人の船を見たことがないのでぜひ見たいと切望する芝居をうったヤパズィウスの妻に対し、女性であるポカホンタスが同行するならば行ってもよいと許可を出した。そこでヤパズィウスの妻が涙ながらにポカホンタスに懇願すると、それに同意したポカホンタスは彼らと一緒に川岸で停泊していたアーゴールの船へと向かった。乗船して食事が供された後、ポカホンタスだけは砲手たちの部屋に留め置かれ、彼女を残してヤパズィウスたちは下船していった。状況を理解したポカホンタスは、「とても悲しげな様子になり、不愉快そうであった。」その後ポカホンタスはジェームズタウンへ連れて行かれ、父親のパウハタン大族長に対して、ポカホンタスが今や植民者たちの手中にあることを知らせる使者が送られた[51]。以上が、ハマーが伝えるところの誘拐の状況である。さらに1613年のジョン・チェンバレンの手紙によると、パウハタン大族長に伝えられたポカホンタス解放の条件は、「すべてのイングランド人捕虜を自由にすること、パウハタン大族長が奪ったあらゆる武器を返却すること、300クォーターのトウモロコシを供出すること」の三つであった。これに対してパウハタン大族長は、「もし娘が丁重に扱われるならば、最初の二つはすぐに履行するが、もう一つは収穫期に行うと約束した。」[52]ハマーによると、その後３ヶ月間は何の音沙汰もなかったが、ついにパウハタン大族長は娘の解放を期待して、７人のイングランド人捕虜と奪った武器、そして500ブッシェルのトウモロコシを送って寄こした。しかし、送られてきた武器が全てではなかったとして、植民地側はポカホンタスを解放せず、翌1614年の３月まで事態は膠着した[53]。

1614年３月になると、パウハタン大族長と直接交渉するために当時ヴァージニア植民地の代理総督であったトーマス・デイル（Thomas Dale）がアーゴール船長の船に人質であるポカホンタスを乗せて多くの兵士とともにパマンキー川を遡上し、大族長がいる集落まで出かけていった。その時の状況は、ハマーの『ヴァージニア事情』に収録されている1614年６月18日付けのデイルが友人に宛てた手紙によると以下の通りである。「・・・ついに彼らは何をしにやって来たのかと尋ねてきた。それに対する返答として私は、大族長

51　Ralph Hamor, *A True Discourse of the Present Estate of Virginia*, pp. 4-6.

52　McClure ed., *The Letters of John Chamberlain*, vol. 1, pp. 470-471. なお「300クォーター」は現在の単位で計算すると約3.8トンに相当する。ただし当時の単位でどの程度であったかは不明。

53　Ralph Hamor, *A True Discourse of the Present Estate of Virginia*, pp. 6-7. なお500ブッシェルは現在のトウモロコシ用の単位で計算すると約12.3トンに相当する。

の娘を連れてきているので、約束通り彼女の対価として大族長が返すと同意した全ての武器や道具や剣、そしてこちらから脱走してそちら側にいる男たち、そしてトウモロコシを、これまでの間違った行いの償いとして引き渡すようにせよ。もしそうするならば、我々は友人となるであろうが、そうしない場合には全てを焼き尽くすと答えた。」[54]するとパウハタン族側は大族長へ知らせをやる時間を要求した。ハマーによると、この時パウハタン大族長は息子二人を船へと派遣し、ポカホンタスの無事を確かめている[55]。デイルの手紙によると、その間に岸に上がったポカホンタスは誰とも口をきかず、ただ以下のように言ったとされている。「・・・もしも父が私を愛しているのなら、こんな古い剣や銃や斧などより私の方が大切だと思うはずです。そうでないのなら、私は私を愛してくれるイングランド人たちと暮らし続けます。」この後パウハタン大族長から使者が送られてきて、捕虜となっていたはずのイングランド人の消息が知らされ、銃や剣やその他の道具は、トウモロコシとともに15日以内にジェームズタウンに届けるという約束がなされた[56]。しかし、結局この約束がされてもポカホンタスは解放されず、その後も植民地側に留め置かれた。

この1613年から1614年の植民地側での抑留期間に、ポカホンタスはキリスト教へ改宗することを求めたれた。それには、植民者の一人ジョン・ロルフ（John Rolfe）がポカホンタスに恋心を抱いたことが背景にあった。ハマーの『ヴァージニア事情』に収録されている1614年に書かれたと思われるロルフから代理総督デイルに宛てた彼女との結婚の許可を求める手紙によると、ポカホンタスとの結婚について、「この植民地の利益のため、我が国の名誉のため、神の栄光のため、私自身の救済のため、そしてポカホンタスという名の不信心者を神様とイエス・キリストについての真の理解へと回心させるためであります」とそのもっともらしい動機を説明している。しかしその一方で、「彼女に対する私の心と気持ちは長らく混乱したままであり、まるで迷宮のなかで虜になっているようで、そこから解き放たれようとくたびれはてています」と本音の苦しい胸の内も吐露している。それでもやはり彼の気がかりは、彼女が異教徒であったことのようで、「私は、全能の神様が、レビやイスラエルの息子たちが異質な妻を迎えることに反対してひどく立腹されることや、それによって生み出される不都合を知らぬわけではありません」とも述べ、良きキリスト教徒としてポカホンタスの改宗に努めるとしながら、「彼女が私に強い愛情を抱いている様子、神様についての知識を教え導いてほしいという彼女の欲求、そして彼女の理解力と良い考えや宗教的なことがらを受け入れようとする彼女の才能や意欲といったことがらが、そうしようとしている私の気持ちをかき立てるのです」とも述べている[57]。

---

54 *Ibid.*, p. 52-53.

55 *Ibid.*, p. 10.

56 *Ibid.*, p. 53-54.

57 *Ibid.*, pp. 63-66.

ハマーの『ヴァージニア事情』によると、代理総督のデイルは結局ロルフとポカホンタスの結婚に許可を与え、二人の結婚式は1614年４月５日に行われた。式にはその噂を聞きつけたパウハタン大族長が自分の代理として派遣したポカホンタスの叔父であるオパチスコ（Opachisco）と、パウハタン大族長の二人の息子も列席した[58]。またハマーの『ヴァージニア事情』に収録されている牧師のアレクサンダー・ホイタッカーの手紙によると、ロルフとの結婚以前に、二人の結婚を許可したデイル代理総督の努力によって、ポカホンタスは「祖国」〔パウハタン族―筆者付記〕への忠誠心を棄て、イエス・キリストに対する信仰を告白し、洗礼を受けたとなっている[59]。前述した通り、彼女の洗礼名はレベッカであったが、ロルフの手紙からも推測できるように、まさにキリスト教への改宗こそが結婚の前提条件であった。その後翌年の1615年から1616年の初めにかけて、ポカホンタスとロルフの間には息子のトーマス（Thomas）が生まれた。トーマスがいつ生まれたのか正確には分かっていないが[60]、ポカホンタスの年齢はその頃だいたい20歳前後であった。このポカホンタスのロルフとの結婚を契機に、パウハタン族と植民地の間には一時的な短い平和が訪れた。

７．イングランド滞在中のポカホンタスとその死

さて最後に、ポカホンタスがヴァージニア会社の要請で家族とともにイングランドに渡り、アメリカの王女として国王ジェームズ１世夫妻と謁見するなど植民地建設への出資を募るための宣伝活動に従事した後、ヴァージニアへ帰還する途中で死亡した経緯を史料で確認していきたい。

ポカホンタス一家は、ヴァージニア植民地代理総督の仕事を終えてイングランドに帰還しようとしていたトーマス・デイルに伴われて1616年４月か５月にヴァージニアを出帆し、６月にイングランドのプリマスに到着した。一行のイングランド到着は、1624年のジョン・スミスの『ヴァージニアの歴史』によると1616年６月12日となっているが、1625年に出版されたサミュエル・パーチェスの『世界遍歴の物語』第４版では、５月か６月の４日となっており喰い違っている[62]。どちらが正しいかは不明である。

他方、ジョン・チェンバレンが国務大臣ダドリー・カールトン（Dudley Carleton）に宛てた1616年６月22日付の手紙には、到着の日時についての記述はないものの、デイルとともに「ヴァージニアから彼の国の老若10人から12人が到着した。そのなかで最も

58　*Ibid.*, pp. 10-11.

59　*Ibid.*, pp. 59-60.

60　Woodward, *Pocahontas*, pp. 168-169; Rountree, *Pocahontas, Powhatan,Opechancanough,* p. 167.

61　Barbour, *The Complete Works of Captain John Smith*, vol. 2, p. 255.

62　Purchas, *Hakluytus Posthumus, or, Pruchas His Pilgrimes*, part 4, p.1773.

注目すべき人物はポカホンタスである」とある[63]。また、これに対しパーチェスは、このパウハタン族の一行のなかには、パウハタン大族長の顧問の一人であるウタマタマキン（Uttamatamakin別名トモコモ〔Tomocomo〕）が含まれていたと『世界遍歴の物語』第４版に書いている[64]。ウタマタマキンは、ジョン・スミスの『ヴァージニアの歴史』によると、パウハタン大族長の指示によってスミスの消息やイングランドの人口、さらには国情を調べるためにポカホンタスに同行したとのことである[65]。このようなウタマタマキンに対し、ヴァージニアの状況を知りたがっていたパーチェスも、直接ウタマタマキンに面会して、彼の歌や踊りを見物し、また彼の国の様子やその宗教について説明を聞いたと『世界遍歴の物語』第４版にはある。またパーチェスは史料の同じ個所で、ポカホンタスの夫であるジョン・ロルフについて言及した後ポカホンタスについて、「彼の妻は礼儀正しいだけでなく、常に王の娘として振る舞っていた。また彼女とその息子に必需品を支給しているヴァージニア会社からだけでなく、彼女のキリスト教への信仰心が増進するよう熱心に望んでいる高い地位にあるいろいろな人々から、彼女の身分に相応しく扱われていた」と書いている。さらにパーチェスは、ロンドン主教のジョン・キング（John King）が祭礼のようなものを催してポカホンタスを歓待したとも伝えている[66]。

ポカホンタスがヴァージニアからやって来た王女と見なされ、重要人物として扱われていたということについては、スミスの『ヴァージニアの歴史』に転載されている1616年に彼がアン王妃に送ったとされる手紙の内容からも窺える。前述した通り、この手紙はポカホンタスをアン王妃に紹介する目的で書かれたものとされているが、まずその前書きで、スミスはポカホンタスのことを敬称付きで「レベッカ様（the Lady Rebecca）」と呼び、本文ではポカホンタスによって命を救われたことを初めとするポカホンタスの植民地に対する功績を長々と説明した上で、「・・・彼女の夫の身分は、彼女が陛下にお目見えするうえで相応しくないものですが、私にできることは、次のことをお伝えすることです。彼女の評判がどのようなものであろうとも、彼女は確かに立派な精神の持ち主であり、彼女を使って、この王国の領土にもう一つの王国を間違いなく加えることができるでしょうが、もし彼女が心から歓迎されなかったら、彼女の目下の私たちとキリスト教への愛着は嘲笑と憤りに変わるでしょうし、よいことのすべてが最悪の事態に向かってしまうでしょう」と王妃に助言している[67]。ここでは、ポカホンタスの夫ロルフが平民であることがポカホンタスの夫として身分違いであり、王妃と謁見する上では不都合であるけれど、尊重されるべ

63　McClure ed., *The Letters of John Chamberlain,* vol.2, p.12.

64　Purchas, *Hakluytus Posthumus, or, Pruchas His Pilgrimes*, part 4, p.1773.

65　Barbour, *The Complete Works of Captain John Smith,* vol. 2, p. 261.

66　Purchas, *Hakluytus Posthumus, or, Pruchas His Pilgrimes*, part 4,p.1774.

67　Barbour, *The Complete Works of Captain John Smith*, vol. 2, pp. 258-260.

き人物であるポカホンタスに対しては、充分に歓待すればイングランドの利益になると述べているのである。

これに対しジョン・チェンバレンは、ポカホンタスについてパーチェスやスミスと比べるとはるかに手厳しい評価を、国務大臣カールトンに宛てた1617年２月22日付の手紙のなかで下している。「この手紙には全く美しくない女性の肖像画を同封します。もしあなたが、困窮しているヴァージニア会社が、なけなしの週４ポンドを彼女の生活費のために支給せざるを得ない状況だということを知らなければ、彼女のめかしこんだ様子や、その上流ぶった態度と称号によって、彼女と彼女の敬虔そうな夫のことを、ひとかどの人物だと誤解してしまうでしょう。」[68]ここで言及されている絵とは、ポカホンタスのことを描いたサイモン・ヴァン・デ・パッセの版画（80頁の図版1参照）のことであると思われるが、なぜチェンバレンのポカホンタス評がここまで辛辣なのか、人種差別的感情か、西洋中心主義的優越感か、その理由は分からない。

さて次に、ポカホンタスのイングランド滞在のなかでのハイライトと考えられてきた、国王ジェームズ１世夫妻との謁見について史料を見てみる。

実際のところ、この件に関する直接の史料は、ポカホンタスに対して手厳しい評価を下したジョン・チェンバレンの手紙と、ジョン・スミスの『ヴァージニアの歴史』にある仄聞をもとにした記述しか存在しない。まず1617年１月18日付の国務大臣カールトンに宛てたチェンバレン手紙には、「・・・十二夜に仮面劇があり・・・例のヴァージニア人の女性ポカホンタスは、彼女の父親の顧問とともに国王に謁見し、慈悲深いもてなしを受けました。そして彼女とその補佐役は、仮面劇への出席に際しては、彼らに相応しい席を与えられました。今彼女は、（彼女の意思に反して）帰途につくために、彼女たちを運ぶ海風を待っているところです」[69]とある。他方スミスの『ヴァージニアの歴史』には、「聞くところによると、国王陛下ご夫妻は、仮面劇やその他の公の場で、デ・ラ・ウェア卿（Lord De La Ware）ご夫妻やその他いろいろな高い地位にある方々とともに彼女を歓待したことに満足されたとのことであった」[70]と書かれている。この1617年１月ころに行われた宮廷仮面劇とは、1617年１月６日の「十二夜」に上演された当時王室の桂冠詩人であったベン・ジョンソン（Ben Jonson）作の”The Vision of Delight”のことである[71]。また、国王夫妻との謁見には、ポカホンタスの随行員としてウタマタマキンが同行していたようであるが、やはりその謁見の場面に、平民である夫ロルフの名前はでてこない。

68　McClure ed., *The Letters of John Chamberlain,* vol.2, pp. 56-57.

69　*Ibid.*, p. 50.

70　Barbour, *The Complete Works of Captain John Smith*, vol. 2, p. 260.

71　Barbour, *Pocahontas and Her World*, p. 176. なお「十二夜」とは、クリスマスである12月25日以後12日間続く祝いの最終日である１月６日の夜のこと。一般に「公現祭」と訳される。

一方、この国王夫妻との謁見の前か後かは定かではないが、ジョン・スミスが当時ロンドン郊外のブレントフォード（Brentford）にいたポカホンタスを、旧交を温めるために訪ねたという記述が、スミスの『ヴァージニアの歴史』にはある。その時の状況と、ポカホンタスが語ったとされる言葉は以下の通りである。

> ・・・彼女が私の何人かの知人とともに滞在していると聞きつけたので、私は彼女に会いに行った。控えめな挨拶の後、彼女は不満そうな表情を見せ、言葉も発せずに後ろを向いて顔を隠してしまった。そのような機嫌の悪さだったので、彼女の夫やその他の人々は、彼女を２～３時間ほど一人にさせることにした。・・・しかし、しばらくすると彼女は話し始め、私をよく憶えていると言いながら、礼儀正しく次のように語った。「あなたはパウハタンにあなたのものはみんな彼のものになると約束して、彼もまた同様の約束をしたではありませんか。あなたは異邦人として彼に国にいる時、彼を父と呼んだのですから、私も同じ理由であなたのことを父と呼ぶことにします。」しかし私は、父というその称号でよばれることは畏れ多いと固辞した。なぜなら、彼女は王の娘であったからである。これに対し彼女は、落ち着いた表情で次のように言った。「あなたは、私の父の国に恐れることなく入り込んで来て、父や父の国の人々に（私はそうではなかったけれど）恐れを抱かせたのに、ここで私があなたを父と呼ぶことを恐れるというのですか？それでも私は、あなたを父とはっきり呼びます。ですから、あなたは私をわが子と呼んでください。そうしてくだされば、私は、ずっとずっとあなたの国の人間になれます。あなたの国の人たちは、いつもあなたは死んでしまったと言っていました。そして、私はプリマスに着くまで、そうなのだと思っていました。でもパウハタンは、ウタマタマキンにあなたを探すように命じました。彼は真実を知っていたのです。なぜなら、あなたの国の人たちはたくさん嘘をつくからです[72]。

このスミスの記述が事実だとすれば、久しぶりの再会の場面でもポカホンタスは、スミスに対して毅然とした態度で接していたようである。上記の引用部分は、ポカホンタスに関する史料のなかでは、数少ない直接話法で語られているものの一つである。この短い彼女の肉声から、彼女の思いや人柄を想像することは難しいが、それでも彼女が意志の強い女性であった様子だけは窺える。

それでは、最後に、ポカホンタスが亡くなった状況について史料を見てみる。

前述のチェンバレンの１月18日付けの手紙にあるように、ポカホンタスは国王夫妻との謁見を終えた後、ヴァージニアへ帰るために風待ちをしていた。その後、スミスの『ヴァー

72　Barbour, *The Complete Works of Captain John Smith*, vol. 2, pp. 260-261.

ジニアの歴史』によると、日付は記されていないが、サミュエル・アーゴール船長の操舵するジョージ号で夫のロルフや息子のトーマスとヴァージニアに向かって出発し、テームズ川の河口近くの町グレイヴゼンド（Gravesend）まで来た時にポカホンタスは突然亡くなったとされている[73]。この状況についてはパーチェスの『世界遍歴の物語』第４版にも同様に、ヴァージニアへ戻る途中、グレイヴゼンドまで来た時ポカホンタスは亡くなり、埋葬されたと書かれている[74]。これに対してチェンバレンが国務大臣カールトンに宛てた1617年３月29日付の手紙には、「例の（私が肖像画を送った）ヴァージニア生まれの女性が、つい先週故郷へ帰る途中にグレイヴゼンドで死にました」と書かれている[75]。このことから、彼女の死が３月の下旬のことであったことが分かる。実際に、彼女が亡くなったグレイヴゼンドのセント・ジョージ教会の教会区記録には、彼女を３月21日に聖堂の内陣に埋葬したとの記録がある[76]。この時ポカホンタスは、まだ21～22歳の若さであった。ただ彼女の詳しい死因について、史料は何も語っていない。

おわりに

以上、史料の記述に従ってポカホンタスの生涯を追ってきたが、この作業を通して明らかになったことを筆者なりにまとめてみる。

まず、各種の史料を見て確認できることは、ジョン・スミス以外でも、ポカホンタスと直接接触をして、彼女に関する記録を残している人物がある程度存在するということである。例えば、植民地の書記官であったウィリアム・ストレイチーは子供の頃のポカホンタスを目撃しているし、ポカホンタスが誘拐された状況については、植民者の一人であるラルフ・ハマーが詳しい記録を残している。またイングランド滞在中には、パウハタン族の風俗に興味を持った牧師のサミュエル・パーチェスがポカホンタスを訪れているし、画家のサイモン・ヴァン・デ・パッセはポカホンタスの肖像版画を制作している。ただし、これらの人々がポカホンタスと関わったのは短い時間だったようで、彼らの残したポカホンタスに関する史料は、いずれも一時的な遭遇の記録でしかない。これに対し、彼女が植民地側に誘拐されて人質となっている間、植民地代理総督としてポカホンタスの管理責任を負っていたトーマス・デイルや、ポカホンタスを預かっていたと言われている牧師のアレクサンダー・ホイタッカー、そしてポカホンタスの夫となったジョン・ロルフは、はるかに長い時間ポカホンタスと過ごしたはずである。しかしそれらの人々が残した彼女に関する史料は少なく、内容も非常に断片的なものでしかない。

---

73 *Ibid*, p. 262.

74 Purchas, *Hakluytus Posthumus, or, Pruchas His Pilgrimes*, part 4, p. 1774.

75 McClure ed., *The Letters of John Chamberlain,* Vol. 2, p. 66.

76 Barbour, *Pocahontas and Her World*, p. 183.

結局のところ、もっとも頻繁に、そして詳しくポカホンタスについて記録したのはやはりスミスであった。そうである以上、スミスの史料の信憑性こそが、ポカホンタスの実像に迫る際の鍵ということになる。しかしスミスの史料は、これまでもずっと論争になってきた通り、書かれた年代によって内容に相違が見られるという難点がある。ポカホンタスによるスミスの助命の話を検討した際に引用した1608年の『真実の物語』と1624年の『ヴァージニアの歴史』の記述の違いがそのよい例であるが、概して古い時期にスミスが書いた記録では、ポカホンタスはそれほど重要な存在として描かれないのに対して、ポカホンタスがイングランドへ渡って有名になり、その後亡くなってから書かれたもの、そのうち特に『ヴァージニアの歴史』では、ポカホンタスが非常に重要な役割を果たす存在へと引き上げられている。しかし、スミスと同時期にジェームズタウンにいたエドワード・マリア・ウィングフィールドの『ヴァージニアの話』や、同じく当時ジェームズタウンにいた植民者たちの記録を収録しているウィリアム・シモンズ編の『ヴァージニア植民地報告書』などを使ってスミスの『ヴァージニアの歴史』における記述を批判的に検討すると、スミスが伝える逸話の信憑性は揺らぎ始める。

もし仮に、ポカホンタスに関するスミスの史料が、捏造された話を含んでいたとしたら、そもそもなぜスミスはそれほどまでにポカホンタスを重要人物に仕立て上げたかったのだろうか。これまでスミスの史料は捏造であると主張している人々によってしばしば指摘されてきたことは、イングランドにおいてそれなりに注目される存在になったヴァージニア生まれの王女ポカホンタスと、自分が特別な関係にあったということを言い立てることによって、スミスが何らかの利益を得ようとしていたのだということである[77]。はたしてそれが事実かどうかを確かめる術はないが、今回いくつもの史料を渉猟して分かったことは、スミス以外の人々は、スミスほどにはポカホンタスに注目していないということである。もし、スミスが強調するほど彼女が重要人物であったなら、もっと社会的な注目が集まり、多くの詳しい史料が残ってもよさそうであるが、基本的にスミス以外の人々による彼女に関する史料はきわめて断片的なものである。

さてそれでは、スミスが語るポカホンタスによるスミスの助命の話や、ポカホンタスの知らせによってパウハタン大族長による謀殺を免れたというドラマチックな話は、やはり捏造なのであろうか。確かに史料を子細に見ていくと、スミスがポカホンタスと出会った1607年当時、ポカホンタスは11、12歳の少女にすぎず、そのような子供が命がけで処刑されそうになった当時27歳のスミスを助けるという話や、やはり12、13歳であったポカホンタスが父親のパウハタン大族長を裏切ってスミスに危険を知らせに来たという話にはやや無理があり、脚色のにおいがする。これらの逸話こそ、400年にわたって語り継がれてきた「ポカホンタス神話」を支えてきた重要なモチーフであるが、史料的に見た場合に、や

77　詳しくは前述の Lemay, *Did Pocahontas Save Captain John Smith?* を参照。

はり怪しげな話だと言わざるを得ない。

その一方で、これらのドラマチックで怪しげな逸話が事実でなかったとして、そのことがどれほど「ポカホンタス神話」に影響を及ぼすだろうか。筆者は、それが事実であろうとなかろうと、基本的にはそれほど影響しないのではないかと考えている。なぜなら、本稿において史料で見てきた通り、スミスを命がけで助けなくとも、ポカホンタスは植民地側に誘拐された後にキリスト教を受け入れ、またジョン・ロルフという植民者の男性も夫として受け入れて彼の子供を産み、ついには一家でイングランドに渡り、植民地建設を進めるヴァージニア会社の宣伝を手伝って、先住民の王女として国王夫妻にも謁見したのである。これらのことは、全て複数の証言が史料的に存在する「事実」である。これらのことがらが「事実」として揺らがないのであるなら、このような、植民者の男性にとって都合の良い先住民の女性が、神話化されずに放っておかれるとは思えないからである。ポカホンタス自身が本当は何を望み、どのような考えを持って生きていたのかは、植民者たちの史料を使って検討する限り完全には解き明かされないであろうが、やはり植民者たちの証言をもとにその人生が物語化された「ポカホンタス神話」も、アメリカ先住民の植民地化をめぐる様々な未解決の問題をはらみながら、今後も語り継がれ、議論の材料になり続けていくことだけは間違いない。

付録：ポカホンタス関連年表

年　月　日	出　来　事
1595～96年	ポカホンタスの誕生。
1607年5月14日	ジョン・スミスら104名を乗せたイングランド船3隻がジェームズ川岸に投錨。上陸してジェームズタウンを建設開始。
1607年12月	食糧調達のためにジョン・スミスがヴァージニア奥地に探検に出かけた際先住民側に捕えられ、先住民の集落を連れまわされた末にウェロウォコモコへ連れて行かれる。パウハタン大族長によるスミスの尋問が行われ、処刑される寸前にポカホンタスによって命を救われる。
1608年1月初め	解放されたジョン・スミスがジェームズタウンへ帰還。
1608年冬～春	ポカホンタスがパウハタン大族長の指示により、植民地側に捕らえられていた先住民捕虜の引き取りにジェームズタウンを訪問。また同じ頃、ポカホンタスが支援のための食糧を携えてしばしばジェームズタウンを訪れる。

1608年秋	ジョン・スミスがニューポート船長とパウハタン大族長の戴冠式を行うという名目でウェロウォコモコ再訪。ポカホンタスを含むパウハタン族の女性たちによる「仮面劇」で歓待される。
1609年1月	ジョン・スミスが武装した部下を引き連れてウェロウォコモコ再々訪。パウハタン大族長と面会。ポカホンタスの知らせにより謀殺を免れる。
1609年10月	火薬の暴発により負傷したジョン・スミスがイングランドへ帰還。その後植民地とパウハタン族の関係が悪化。
1609年冬～1610年春	ジェームズタウン植民地の「飢餓期」。
1610年頃	ポカホンタスがパウハタン族の族長の一人ココアムと結婚。
1613年４月	ポカホンタスがサミュエル・アーゴール船長によって誘拐され、先住民側に捕らえられているイングランド人捕虜の釈放や食糧の供出などの取引に利用される。
1613年夏頃	ポカホンタスがジョン・ロルフと出会う。
1614年３月	交渉のため、植民地代理総督のトーマス・デイルがポカホンタスを伴い、パウハタン大族長が滞在していた集落を訪問。ポカホンタスがイングランド人と暮らすと表明。この頃、ポカホンタスがキリスト教に改宗。
1614年４月５日	ポカホンタスがジョン・ロルフと結婚。この結婚により植民地とパウハタン族の間で一時的な平和が回復する。
1614年～1615年	ポカホンタスが息子トーマスを出産。
1616年６月12日	ポカホンタス一家とウタマタマキンらパウハタン族の一行が、トーマス・デイルに伴われてイングランドのプリマスに到着。
1616年夏～冬	サイモン・ヴァン・デ・パッセがポカホンタスの肖像版画を制作。
1617年１月６日	ポカホンタスがウタマタマキンとともにジェームズ１世国王夫妻と謁見。「十二夜」に上演された宮廷仮面劇に招待される。
1616年秋～1617年冬	ジョン・スミスがブレントフォードに滞在中のポカホンタスを訪問。
1617年３月中旬～下旬	ヴァージニアへ帰るためポカホンタス一家がロンドンを船で出発したが、テームズ川下流のグレイヴセンドで急病になり、そのまま死去。
1617年３月21日	ポカホンタスがグレイヴセンドのセント・ジョージ教会に埋葬される。ジョン・ロルフは病気となった息子トーマスを残し、ヴァージニアへ一人で帰還。
1618年	パウハタン大族長が死去。植民地とパウハタン族の関係が再び悪化。